

お茶飲み仲間で支え合い

西山タカさん・坪井キウ子さん

西山タカさん（74歳）は、週に5日程度、北田鐘突堂地区かねつぎどうの自宅で過ごします。いわき市の仮設住宅から自宅に戻ったときは必ず、すでに帰町し、近所には必ず、すでに友人の坪井キウ子さん（80歳）に電話をかけて、「来たよー」と知らせます。

二人は「お茶飲み仲間」。西山さんが自宅にいれば、毎日のようにお互いの家を行き来します。手料理や漬け物、お菓子などをおすそ分けしたり、それぞれの家庭菜園で採れた季節の野菜を交換したりしながら、お茶飲みとおしゃべりを楽しんでいます。

料理をするとき、ちよつと足りない材料や調味料があったりすると「分けてー」と気軽に頼み、融通し合える間柄。まさに

昔ながらの「向こう三軒両隣」的な近所づきあいです。

「ここなら商店街」へも、よく一緒に出かけます。出かける前、あるいはあと、時間に余裕があれば、どちらかの家でのんびりお茶飲み。

日々顔を合わせることで、お互いの様子もよくわかります。困りごとや悩みを話し合ったり、体調の変化にいち早く気づいて注意を促したりできます。



この日は西山さん（左）の家でお茶のみ



「もろもろ塾」のそば打ち道場に参加し、打ち立てのそばを味わう



「結いの里」のサロンに参加する坪井さん（左端）



「ここなら商店街」で一緒に買い物



近隣の家々に、まだ人影はまばら。

「この辺の人は4〜5軒しか戻っていないの。でも、さびしいとは感じないよ。家事や畑仕事が結構忙しいし、友人としょっちゅう会ってお茶飲みしているから」と西山さん。ひとり暮らしですが、自宅でも仮設住宅でもご近所づきあいをたいせつにし、積極的にお茶飲みをするので、いつも多くの仲間が囲まれています。

自宅の庭には桜の大木があり、昨春、避難先で知り合ったいわき市の人たちを招いて花見会を

催しました。こうした集まりや日々のお茶飲みで、得意な料理を皆に振る舞うのも「楽しみ」と言います。

一方、坪井さんは3歳年上の夫と二人暮らし。

西山さんとの日々のお茶飲みのほかに、週に一度は夫とともに「やまゆり荘」のデイサービスに通います。入浴や体操より、好きな縫いものに集中する時間として活用しています。また、月に一度、近くの障害者支援施設「結いの里」が開く交流サロンに参加し、食事会などを楽しんでいきます。

ご近所づきあいやお茶飲み、食事会などで生み出される楽しさは、心の栄養。その楽しさを分かち合うことは、誰でもできる支え合いのひとつです。